

日本に残留し定住したある中国人

～在日華僑・韓慶愈が生きた「もう一つの昭和史」～ 第5回

大類 善啓

《前回までの粗筋》 多忙と「遊び心」？ が重なり、第4回（会報6号）で本稿が止まっていたところ、読者から、その後の続きを読みたいという声が入った。ということで、中国が改革開放路線を取って軌道に乗る段階まで書いていきたいと思う。新たな読者のために前回までの粗筋を紹介しておく。

韓慶愈は遼寧省で生まれ、ハルビン第一国民高等学校（旧制中学）2年終了後の1943年、「満州国」から茨城県の太田中学に留学した。が戦局は悪化。新潟から船で帰国しようとしたが、ソ連の参戦や日本の敗戦のため出港した船は中国へ行かず、日本に舞い戻ってきた。韓はやっと日本から解放されたと思ったが、蒋介石の国民党代表団からは、「祖国を裏切った漢奸」とみなされ国民党に失望。新聞記者の見習いをしながら東京工業大学に進学。新中国の誕生は、華僑たちの帰国熱を促し、韓も1953年第1回の帰国船に学生代表として中国に行き、天津で廖承志に面会した。その時、廖は韓に、中国に帰国せず「日本に残り、華僑向けの新聞を出せ」と指示した。韓は一瞬躊躇したが納得して日本に戻り、『大地報』という新聞を創刊した。日中関係は徐々に発展、李徳全を団長とする中国紅十字会代表団や京劇の名優・梅蘭芳などの来日では通訳として活躍。1970年には日本政府から初めて帰国申請が許可され初訪中し新しい中国を見る。しかし、韓も中国では「スパイ」として見られていたなど、日本にいる華僑とはいえ文化大革命を挟んで波乱の人生が続く。

35 “馬賊”も現れた日中国交回復前後

韓慶愈が戦後初めて訪中した1970年当時の中国は、今と違い、中国は外に向かっては閉鎖状態だった。韓が中国へ行くということがわかると、“交流”のあった公安関係者から「ぜひ会いたい、中国の実情を見てきてほしい」と言われたことは前述した。

それ以外にも、こういうエピソードがあった。戦前の中国大陸で“活躍”した日本の馬賊に会わせられたのだ。

仕事で付き合いのあったY氏が、「馬賊の小白竜に会わせたい」と言う。小白竜こと、小日向白朗氏は、モーゼル銃を神業のように扱い、義賊として一定の中国地域住民に支持されていたらしい。が一方、日本陸軍の職員としての顔をもっていた。1900年（明治33年）生まれで新潟県三条市出身。1926年（大正15年）16歳で大陸に渡り、馬賊に捕われ、下働きの後軍功を上げ、やがてその頭目になった。中国名は尚旭東、中国民衆からは小白竜と呼ばれ親しまれていたという。

その小白竜に会わせたいというY氏は、戦争中は大手商社にいた。戦後、日中貿易を推進しようと全力を挙げて活動している鈴木一雄の知り合いでもあった。日中貿易促進会の専務理事だった鈴木一雄とは韓はととても親しくしていたので、おのずとY氏とも知り合う

ようになっていた。

Y氏は、インドネシアの石油開発にも関わる一方、「揚子江にダムが出来れば、日本に電気を持ってこられる」というような気宇壮大な話をする人だった。そのY氏が、「中国へ帰るのだから小白竜に一度紹介しておきたい」というので、韓は大久保付近にあった事務所に連れて行かれ小白竜に会った。小白竜は、一方的に韓に話し出した。もう当時の内容はほとんど記憶の外にあるが、小白竜の話は大陸浪人的で、ほら吹きのような感じがしたという記憶が今でも韓には残っている。

「第4野戦軍の林彪をよく知っている」と、は盛んに韓に言うのだ。林彪に会ったら、「私の名前を言っていない」と言う。韓は内心苦笑しつつ小白竜の話を聞いていた。小白竜は、餞別に当時の金で5万円ほどくれた。今なら30万円ほどになるだろうか。中国に行ったが、もちろん林彪に会う機会もなく、韓は日本に帰っても小白竜に話すこともないのでそれっきり、一度だけの出会いだった。

実は筆者も、1979年にこの小白竜に一度会ったことがある。

1978年の夏から1年ほど、筆者は大本（教）の出口王仁三郎に魅せられ、ドロップアウト！ し京都の綾部にいたことがあった。その時、大本の友人である出口三平さんが、今は亡き作家の出口和明氏と共に小白竜を取材したことがあった。小白竜が戦前、王仁三郎に会ったことがあるというのでその話を聞くためである。仲介したのは小白竜と親しくしていた大本信徒の大宮真人氏である。ちなみに小白竜が1982年、82歳で亡くなった時、ある大手新聞は、小日向白朗氏の死亡記事を載せた。どうも本物の小白竜だったようである。葬儀委員長をされた方だ。

小白竜が話すテープを綾部の出口三平さんの自宅で聴かせてもらったが、実に聴き取りにくいテープだった。肝心の王仁三郎との出会いの話もなく、三平さんも改めてテープを聴きながら、「なんだか支離滅裂で・・・」で鼻白んでいる。

かつて周恩来に、ある人が小白竜の写真を見せたところ直ちに、「これは偽者だ」と喝破したという話を聞いたことがある私は、「小白竜と言っても偽者もいるんだよねえ」と三平さんに語ったことが懐かしく思い出される。

36 キッシンジャー訪中秘話

その時から半年経つたろうか。1979年の秋、私は大宮氏と一緒に東京郊外の小白竜の自宅で彼に会った。小白竜はその頃も、韓が言うように大陸浪人的というか、雲を掴むような話しぶりだった。例えば、首相を務めた佐藤栄作の死についてこんな話をした。佐藤は1975年、築地の高級料亭で自民党幹部や財界首脳と会食中に脳溢血で倒れた。4日間料亭で容態を見たのち慈恵医大に移送されたが、一度も覚醒することなく昏睡を続けた後亡くなった。その佐藤を、小白竜は「自分が呪いをかけたから死んだのだ」と言うような話をするのだ。確かに佐藤の死は、一部でミステリーのように語られていたことは確かだったが。

唯一リアリティーを感じさせたのは、彼との話を終えて引き揚げようとした際、どうし

でも聞きたかったことを訊ねた時だった。それは、1971年、キッシンジャーによるミステリアスな秘密訪中に関する米中の交渉秘話に関することである。

1971年当時、週刊誌の記者をしていた私は、キッシンジャーの極秘訪中には、戦前から中国に存在していた伝統的な秘密結社が絡んでいるという話を聞いていた。ミステリーに満ちた極秘訪中を実現させる前に、アメリカは必死になって中国とのパイプを捜していたようだが、その一人が小白竜だったというのである。

ロスチャイルド一族の男に“可愛いがられている”というI・R女史が、小白竜を見つけ、小白竜をアメリカへ連れて行ったというのだ。当時は、そんな話を半分、眉唾的に聞いていた。小白竜の話を聞いているうちに、この話が本当なのかどうかを聞いてみたい誘惑にかられたのだ。そこで帰る間に、I・R女史の話を切り出した。

すると突然、老人風に見えた小白竜の眼が輝き出した。「君はI・Rを知っているのか」と問いただしてきた。私は突きつけられるような彼の問いにやや慌てた。「いや、I・Rには会ったことはないが、米中の秘密接触に絡んでいたという話を聞いたことがあるので・・・」と応えた。実際、I・Rには一度も会ったことはなく、彼女のM資金にからむ詐欺話など半分与太話を知っていたに過ぎない。

小白竜は、I女史のことを話し出した。ある時、I女史が小白竜の前に現れ、アメリカへ行こうという。実際、小白竜はアメリカに連れて行かれ、アメリカの国務省で、ある役人に会わせられたようだった。そのアメリカ人との話の途中、小白竜がトイレへ行くと、そのアメリカ人もついてきた。「連れション」である。

その時「アメリカ人は、きれいな北京語で俺に声をかけてきたんだ」と、小白竜は語るのだ。このI女史との話だけは、実にリアリティーがあった。この「小白竜」は本物か偽者かどうかわからない。大陸で“活躍”していたなら、北京語は喋れるはずだ。そんな判断で、この国務省の役人は北京語で小白竜に声をかけたのかもしれない。

1970年頃、中国もアメリカとの接触を望んでいた。周恩来は、ある人が持参した小白竜の顔写真を見せるや即座に、「これは偽者だ」と言い放ったという話はこの時期のことである。革命を闘い抜き、さまざまな情報網を持っていたであろう周恩来には、本物か偽者かを見分ける識眼があったといえるエピソードの一つかもしれないが、これも真偽のほどはわからない。

当時、やや怪しげな話だった米中の秘密交渉に絡むエピソードがその時、実にリアリティーをもって翻ってきた。アメリカはいろんなルートを使って中国との窓口を探していたのだ、という話は本当だったとその時改めて思ったのだった。

37 中ソ対立、日中両共産党の対立が波及

韓が手がけた仕事の中で重要な『日本工業技術』という話を始める前に、今一度、時代をもう少し前に戻そう。

1952年にモスクワで国際経済会議が開かれ、翌年の53年に同じ国際会議が中国で開催されたことは前に話した。その時、中国で国際貿易促進委員会が成立した。モスクワの会議に参加していた国会議員の高良とみ、帆足計、宮腰喜助ら3人がモスクワから北

京入りをした時である。そして日本でも、1954年に国際貿易促進協会が設立された。この時の立役者が前回にも紹介した鈴木一雄だった。鈴木は、中国と同じように促進「協会」ではなく、促進「委員会」にすべきだという意見で、事務局は日中貿易促進会が担当するという腹づもりだった。日中貿易促進会は、1950年の初めごろに成立した文字通り中国との貿易を推進するために作られた日本共産党の親中派組織だった。組織は大連商業出身の首藤実が実質的なリーダーだった。ところが蓋を開けてみると、共産党系以外の村田省蔵など、三菱商事や三井物産などのダミーが入っていて、鈴木意志は多勢に無勢で結局、「委員会」でなく「協会」になり、事務局を別個に作ることになってしまった。鈴木は意のままにならず無念の境地だった。

中ソの動きが徐々に日本の左翼陣営にも反映されてきた。1963年、中国はソ連を修正主義と批判する。

「銃から政権が生まれる」。毛沢東は高らかにそう宣言していた。ところが、日本共産党は議会を通して多数を獲得して共産党政権を実現しようと考えていた。日本共産党は中国と距離をおくようになっていった。そうして日中貿易促進会から鈴木一雄など親中派の人たちが追い出されて行った。日中貿易促進会は最終的には1966年10月解散した。

38 「日本の工業技術を伝えなければ・・・」

日本の優れた工業技術を中国に伝えることは、中国の発展には欠かせないことだ、と前々から考えていた韓は、なんとかして日本から中国向けの技術総合誌を発行したいと思っていた。

1964年の4月、中国国際貿易促進委員会の主席だった南漢震が、日本で開催される経済貿易展覧会のために来日した。中国の対外貿易業務の最高の地位にいた南漢震一行を迎える事務局が作られ、韓は華僑を代表してその事務局に入った。連日、赤坂にあったホテルニュージャパンの大きい部屋の一室に韓も泊まった。展覧会が閉幕になった後、南漢震らは日本を視察した。その折り南漢震から、雑誌や新聞を発行するにしても、「自力更生をしろ」と言われた。

そのような事情もあり、韓は中国語の雑誌を通して日本の工業技術を紹介する構想を考えた。翌年の1965年、南漢震が原水爆禁止世界大会・中国代表団団長として日本にやって来た時、そのアイデアをぶつけてみようと考えた。韓はそのアイデアを寥事務所のスタッフに説明し、協力して南漢震を説得してくれるように頼んだ。一人だけで南漢震を説得できる自信がなかったのだ。

当時、寥事務所の首席代表だった孫平化は、その日用事があり南漢震の所へは行けない。そこで韓は、呉曙東と陳抗の二人の代表を連れて南漢震の所に行き企画書を見せたところ、南漢震は、「なんだ、このことなら、韓さんが一人来るだけで充分じゃないの」と言った。韓はいや、「心細かったから」と言うと、「君ならよく知っているから大丈夫だよ。わかった」とすぐに了解してくれた。

その言葉を聞くと韓は用意周到に、墨と紙を出してタイトルの字を色紙や軸などを入れ

て3枚ほど書いてもらった。その趣旨は、「日本の工業技術を紹介することは日本と中国との友好関係にも役立つ」という内容である。この南漢震の言葉は、日本の業界を説得するにはいい手段だと思った。日本の商社やメーカーが、中国と貿易するには中国の国貿促抜きには考えられない。中国の国貿促が元締めである。そのボスに書いてもらい、それを日本での営業用に使おうと考えたのだ。チラシを作り宣伝文句にして、1965年のうちに創刊号を出そうと思っていた。

3.9 雑誌創刊に横やりが入る

ところが思わぬところから、横やりが入った。韓の企画を知って、鈴木一雄の後を受けて日中貿易促進会の専務理事になっていた隅井正典が動き出したのだ。

韓のアイデアを剽窃するかのように、1965年、隅井正典らは密かに北京へ行き、中国の国貿促に自分たちも雑誌を刊行したいと話しに行った。

韓は自分のアイデアをこのような形で盗まれ愉快ではない。すでに準備をして広告もそれなりに取り付けていた。隅井たちは韓の存在を無視できないことは知っていた。そして帰国するや、「雑誌は、韓先生抜きにできませんから」と編集顧問になってくれと言ってきた。隅井たちと争っても良くない。中国の政策にも合わないと思い、韓は中国の国貿促に「わかった」と言い、協力するようにした。また、当時は両方の組織が同じような雑誌を発行できるほど中国市場は大きくはなかったということでもあった。

1966年になると、日中の共産両党は激しい論争を繰り広げた。その結果、中国側は「日中貿易促進会を相手にせず」という声明を出した。同時に、彼らが出した雑誌は受け取れないと言い出した。雑誌を発行しても、中国に送付できなかつたら広告料は取れない。困り果てた日中貿易促進会の事務局長である押川正夫は、寥事務所の呉曙東の所に泣きついた。押川は日共系に属していたが、彼個人は反中国派ではなかった。

押川は呉曙東から「これについては韓慶愈に相談をしなさい」と言われた。押川はそれで韓のところに来た。すでに翻訳料や印刷代などが200万ほどかかっていた。押川はなんとかならないものかと韓に言ってきた。すでに雑誌はほぼできつつあった。

そのために新しく表紙を変え、奥付も変えた。中国は、日共系の企業広告などは受け付けなかったので、日共関係の頁を差し替え、新規に装丁し直して発行した。1966年のことである。タイトルは「日中貿易」とした。

4.0 難産だった『日本工業技術』の創刊

そのような事情もあり、『日本工業技術』を生むまでには紆余曲折、さまざまな苦労があった。しかしやっと1967年に創刊号を出すことができた。季刊である。創刊号には、日本電気の社長だった小林宏治に半導体関係について論文を書いてもらった。

発行当初の頃は、中国は文化大革命の真最中である。しかし、中国からお墨付きをもらっていたから強い。中国へ送った雑誌は、中国・国貿促の技術交流部が責任をもって工場や研究所に配布してくれた。印刷した2000部のうち、1000部以上を船便で出した。残りは営業用として日本で活用した。だいぶ後になってから、巻末にアンケートはつけた。

筆者が1979年に、大地報社の後身の向陽社に入社した当時も「日本工業技術」を発行していたが、返信されてきたアンケート用紙には事細かく、「貴誌に掲載されていた製品や技術に関する資料を送ってくれ」という文面も見られたが、まだ文革中の時は、アンケート用紙もつけていなかった。

韓は、日本の関係者から中国での「日本工業技術」の反響を聞かれると、いつも「大変な反響ですよ（笑）」と答えていたそうだ。

ある時、日本の支援者から、「雑誌に毛語録がないとだめだ」と言われた。掲載する論文は技術的なものであり、イデオロギー色が無い技術雑誌に毛語録をつけたって意味はないと韓は思ったが、その日本人は中国一点張りだ。その人が所属する団体は韓の応援団体でもあり、しぶしぶ同意して毛語録を最初の頁につけた。

1969年には北京で日本工業展覧会が開催された。その時、韓は「産品総覧」という総合目録を作った。監修は日本の国貿促である。韓は、編集、翻訳などで奔走し1200万円ほど稼いだが翌年、過労で倒れてしまった。韓にはあまり儲け話は似合わないが、この時は広告料も多く入り潤ったので、大盤振る舞いをして国貿促に120万円ほど寄贈したこともあった。国貿促に行った時などは、冗談交じりに「君たち、ちゃんとやっているかい」なんて軽口をたたけるような時期だった。社員は5、6人の小世帯だったが、こんな話をするときの韓には微笑が絶えない。

世界的な半導体の権威者である西澤潤一氏を知ったのもこの頃のことである。

『日本工業技術』は、中国向け担当者で知らない人がいないほどになり、広告は充分とはいえないが、とりあえず満足できるほど集まった。広告の営業は(株)貿易事業社が担当した。社長の北村とは友人でもある。広告を取るために、北村と一緒に貿易会社を歩いた。「中国と商売をしたいなら広告を出しなさい」と、企業の担当者に説得する北村は広告営業のベテランだ。韓はその方面では歯が立たず、話すことはもっぱら中国の政治や経済事情だった。

文革当時の中国が相手だと、商社マンの中には「こんな時代に商売は大丈夫ですかね」という意見も出そうに思えるが、現実にはそんなことはなかった。韓は当時40代である。まだまだ若い気分で意気込みもあったから、仮に中国には「自由はない」という論争になると、「じゃあ自由とは何だ」といって論争する。そんな時代だった。

文化大革命の時代の中国は、日本人だけでなく、世界からも不可解な国に映っていた。しかし中国担当者にすれば、やはり中国の展示会に出展して実績を作りたいと考えている。日本人の中国担当者から見れば、やはり中国事情に詳しい華僑の韓から少しでも話を聞きたいという気持ちだ。当時、「中国に恐怖心をもっていた会社など1社もなかった」というのが韓の実感である。

4.1 イデオロギーの終焉

1969年に上海で「日本工業展」が行われた。文革中といえども、中国人が何万人も見にくるのだ。長崎国旗事件で1958年から60年まで日中貿易は途絶えていたが、そ

れでも1957年、58年には、北京と上海で展示会、大阪でも展示会が開催されていた。南漢震とはずっとそういう時期からも付き合いである。しかし、その南漢震も文革の時、自殺した。たぶん、1967年か68年頃だったろう。韓は、中国へ行った人からそのことを聞いた。言葉は出なかった。

その頃、韓の親しい中国の人たちはほとんど行方がわからなかった。対日関係の中心人物である廖承志は表舞台には出てこず、周恩来が中南海の一角にかくまっていた時期である。

混乱の中、日本での文革をめぐる争いについて、中国側の指示を仰いだところ突然、「大地報社をやめろ」と中国側から通知がきたということは前回に記した。

やむを得ず、韓は大地報社を解散し閉鎖した。そこで「産品総覧」で儲けた1200万円の収入と、社員がもらった退職金を出し合って、新たに株式会社向陽社を1970年2月16日に立ち上げた。新会社は、翻訳、出版（工業技術、工業辞典、電碼本など）、そして写植を使って国貿促の新聞や「貿易必携」などのハンドブックを出していった。

1971年、前出のようにニクソン訪中が電撃的に発表された。それと共に、韓も忙しくなった。仕事が目に見えて増えてきた。日刊工業新聞などの専門紙がメーカーの中国向けの動きを報道する。そういう会社にはすぐ、「協力しますよ」と電話をかけて営業活動をする。大地報社から向陽社に変わっても常に仕事はあった。

日本の企業はイデオロギーでは動かない。要は少しでも貿易量を増やしたいのだ。韓のところに相談に来る人たちは、韓が中国人なのでうまく韓と話せば中国との取引も順調にいくのではないかと思う人もいた。

日本のビジネスマンが本当に知りたいのは何なのかと考えた時、文革時のように毛沢東思想万歳だけでは役に立たないことはわかっている。若い日本の記者たちは、新華社や人民日報の調子に引きずられていく。これではまずいと考えた。本当に知りたいのは中国の工業関係のニュースではないだろうか。幸いに、中国新聞社（新華社と並んで大きい通信社で、海外にいる中国人にニュースを出していた）とも付き合いがある。そこで組んで香港からニュースをもらおうと考えた。昔の「大地報」は毛沢東万歳のニュースで埋まっていた。その大地報を停刊した今、大地報で蓄積したアイデアを活用して中国の工業ニュースを出す時期だと思ったのだ。

そして1970年の1月に第1号を新天社という別会社を作って出した。韓は、夫人の美津と数人の翻訳者たちで出発した。中国の工業技術のニュースを出して採算が取れるなら、向陽社が赤字になっても生きていけると考えたのだ。夫人の韓美津は身を粉にするように働いた。若い友人の相原あや子は、骨惜しみせずタイプを打ち続けた。輪転機のオフセットを40万円で買ったのもその頃である。